

牧師室から (2020.11.22)

棘魚という魚がいる。いろいろな種類があるようだが、日本にいるのは、イトヨとトミヨという名のものらしい。

5センチから10センチくらいの大きさで、淡水型と、冬は海で過ごす降海型がいて、背中に棘を持っている。面白いのは、雌は卵を産んでから去ってしまい(次の卵を作るための準備に入るようだが)、巣作り、子育ての全てを雄が行うということである。雄は卵に新鮮な水をかけてあげたりしながら、必死で敵から卵を守る。そして、卵から孵化したばかりの子どもが巣から離れようとすると口に入れて元に戻したりしながら、子どもたちが独立できるまで頑張るらしい。一年数ヶ月の寿命のうちに1~3回子育てをするようだが、子どもたちが巣立った後に気力を使い切って死んでしまう雄もいるよう。韓国で、そのような棘魚に譬えて父性愛を書いた小説がベストセラーになって、私は涙を流しながら読んだ記憶がある。棘魚だけではなく、その他の動物においても弱肉強食の世界で子どもを守ろうとする親たちの命かけての踏ん張りは感動的である。

それは人間の世界においても同じだが、しかし、一部ではあるが、自分の子どもを虐待したり、まれには自分の子どもを殺す親までいることには悲しい限りである。暗闇のこの世の中で親の心も傷つけられ、病んでいるのだ。それはその人だけの問題ではなく、社会全体的な危機として考えざるをえない。特にコロナ過の中で、そのような悲劇が増加しているのは心痛ましいことでもあり、私たち皆の将来を暗くする。現実的な支援が必要であるのは勿論のことだが、もっと根本的な癒しは神様の愛を知らせることにあるのではないだろうか。神様の愛はこの世を越えた論理でも観念的な話でもない。ご自身の独り子をこの世に送ってくださるほど、真実で、現実的な愛である。

私たちが信じる神様は、腕を支えて歩くことを教え、癒し、私たちの顎から軋を取り去り、身をかがめて食べさせてくださる方である(ホセア 11:3、4)。その愛を知り、伝えることは、真の隣人愛であるのだ。水とパンと共に、人間の限界を越えて働いてくださる神様の無限の愛を知らせることは、動物や人間に与えられている愛の本能を回復していく道であり、希望であるのに違いない。

そのキリスト者としての使命を果たすことができるよう主の御導きと憐れみを乞うばかりである。  
(鈴木善姫牧師)